

列車

記憶の始まりから、私はずっとこの列車に乗っていました。この列車はとても長く、乗り降りする乗客も多いです。私と一緒に長い間乗ってくれた人がいれば、すぐに降りる人もいました。

最初に降りたのは昔の友達でした。雪の日に私たちが笑いながら手を振り「さようなら」と別れの言葉をくれました。きっとまた会えると思いました。でも戻りませんでした。

列車が速く進むにつれて、かつて忘れられないと思っていた記憶は少しずつ薄れていきます。それは窓の外を速く進む景色のように、形だけがぼんやりとして残ります。窓の外を見つめながら、ある人を思い出しました。それは初めて、この長い旅路と一緒に最後まで過ごしてくれる人がいると思いました。

春の日になって、彼は突然立ち上がりました。

「しまった。違う列車に乗った。」

「どこに行く？」

「わからない。とにかくこの方向じゃない。」

「一緒に行ってもいい？」

「でも君は自分の目的地に向かわなきゃ。」彼はドアの方へ行きました。

「じゃあ、さようなら。」

彼は綺麗な晴れた日、私に別れを告げました。私はふと、友達に別れを告げられた雪の日を思い出しました。これが彼と最後の会うことだと気づきました。

列車は私の悲しみのために止まってはくれませんでした。私はまた人を迎えたり、見送ったりしました。

しばらくして、また一つの駅につきました。車窓に映る自分の影を見てみると、ずいぶん変わった気がします。まさかこの駅で降りるのが両親だとは思いませんでした。二人は子供の頃と同じように私の頭をなでて、「君の終点で待っているよ。」と一言残しました。

「私の終点はどこだろう？」列車はまた動き出して、その質問は風に消えていきました。

初めて自分が乗っている列車を観察しました。壁には大きな時計が掛かっています。「もし針を動かしたら、列車は戻るのかな？」と思いました。でも、私には針を回す力はありません。皆を引き留められないのと同じように。列車がもう戻ってこないのと同じように。

私はこれらの思い出を抱えながら列車に乗り続けていました。時計の針が何度も回り、列車が止まりました。私はふと、ここで降りるべきだと気付きました。

列車を降りると、両親が見えました。ある人や友達、これまで出会った人々もいました。私は彼らの方に歩きながら、全ての思い出を乗せた列車を振り返って見ました。列車の先頭にはその名前が書かれています - 「時間」。

(996 字)